規格外

これは、何の規格外かといえば、性教育的な規格外のことです。
具体的には性教育的な規準では規格外になる条件下で生まれた人です。レイプで生まれたなんて言ってしまうと身もフタもないので、そう言っておきます。
性教育がなかった時代に比べたら、今の時代はよくなりました。女は性知識を得てから男を選べるようになったし、男はうっかり性暴力に走ってしまうことも少なくなったでしょう。昔は性暴力が暴力ともみなされず、男らしさ、みたいな評価で大目に見られたりしましたが、今やどこの国の性教育でも、性暴力は非とされ、教育でそれを防止しようとしています。教育で間に合わなかった部分は法律でとりしまりますが、これが日本でもかなり手厳しくなり、いわば世界標準になったことはいいことです。即ち、性交において、事前に相手の同意を得なかった場合は犯罪になります。
そんな法律も教育もなかった昔、女たちは暴行されても泣き寝入りで、妻たちでさえ、望まぬ妊娠、出産をしたことでしょう。生まれた子供たちはそうと知らずに、両親の仲などに深入りせず、勘ぐることなく、お行儀よく成長したのでしょう。自身が性教育的には外れているとも思わずに。
中には行儀のよくない、詮索好きの子もいました。これはそういう子が書いた記録です。

その子は成長し、結婚し、出産もしました。今や孫もいて、申し分ありません。閉経後、気楽な性生活を楽しんでいます。なにせ避妊の手間がいらないのだから。
「好きやからできるんやね」
遊び終わった後、身なりも整えた夫が、まるで他人事のように言います。自分の遊び方に感心しているようです。実に発情中の彼は何でもありの奔放さ。私は彼を可愛く思います。かつて子育て中、小さな息子を可愛いと思ったように、私は彼を可愛いと思う。
だから彼が「あんたのぴくぴくを感じたい」と言えば、「あー、いつもそうならいいな」と思う。若い時は、ほぼ百発百中で、痙攣したけど、歳重ねるとそうもいかなくなりました。以前は一度ならず何度もイッたりしました。こちらの痙攣が相手に、えも言われぬ満足を与えることなど、若い時には無頓着でした。誰でもそうなると思っていたし、そうならない日も来ることなど考えもしませんでした。
閉経して久しい今でも、気持ちにゆとりあって、体調もいい時は自分からその気になり、ちゃんとイケます。ぴくぴくもあります。誘われて仕方なく応じる時など、無反応で終わってしまうこともあります。拒否したいほどでもないし、行為が困難というわけでもないから、受け入れるのですが、まあ、相手は受け入れてもらえるだけでもいいと思っているようです。
オーガズムは女性にとって何よりの健康法だといいます。それを奪う権利など誰にあるというのでしょう。女を生んだ親ですか。女を買う男ですか。夫ですか。妻が浮気をしないよう不感症にするために。FGM など思いつくのは誰だったんでしょう。

実は私、老母の介護にあくせくしていた数年間は、全くご無沙汰でした。要介護老人と同居では、その気にもならないし、すでに 60 代だったわれわれ夫婦は既に色気は卒業したと思っていました。周囲の同じ年ごろの人たちもそのようだったし、われわれも同様で何の不思議も感じませんでした。
その中でも、あの人は例外かなと思う人がいます。息子の同級生の保護者です。事情があって保護者として参観日などに出てくるのは父母のどちらでもなく、祖母の方(かた)でした。息子も友人の家庭の事情をあらかた知り、友人もわが家の事情をあらかた知っていたと思います。その祖母さんが私に言いました。

「あんた、お母さんのお世話も大事やろけど、ご主人も構うてあげなあかんで」と。私が「はい」と言うと、続けてこう言いました。
「なんにも難しいことない。こうやっとればええことや」
と大の字で寝る格好をして見せました。介護のわずらわしさに比べたら屁のような事とでもいうように。街中での立ち話なので、私はちょっと戸惑いました。夫の相手をすることをずいぶん事務的というか、用事のように言うので、この人にとってはそういうものなのかなと思いました。それでも、夫婦生活を卒業していないような話し方は頼もしいことでした。私より十数歳年上の筈でした。私 60 歳の頃だから、その方は 75 歳ぐらい。

自身の性生活が殆ど空白だったその頃に、私は自分の女親の性生活を知りました。それまでも、お粗末なものだとは思っていましたが、**強姦**と言うほどの酷さだとは思いませんでした。女親は 90 歳近くになって、やっとはっきりそう言いました。私はその言葉（特に漢字）が嫌いなので、**レイプ**と言います。すでに男親は死んでいて、われわれはやっと人並みに近い暮らしができるようになっていました。女親の幾つかの思い出話や、秘話から、女親の両親の非情さ、残酷さも知りました。女親は 95 歳まで生きましたが、足腰は衰えても頭は大してボケることなく、私の知りたい事にはほとんど満足いく答えをしてくれました。私の子供時代には、何かにつけて「知らんでいい」と門前払いをしたことの償いのように、色々話してくれました。

やがて、私の介護生活も終わり、心にゆとりもできて、ふと回春を企てるようになり、やってみると意外と出来るようになったのです。最初は絶望的でした。夫曰く「ひょうたんの口のように狭く硬くなっている」と。

それを徐々に軟化させるため、潤滑ゼリー始め、いろんな工夫をして、なんとか回春相成りました。その時の夫の喜び方は手放しの派手なものでした。友人知人もほとんど皆、卒業しているのに、自分はし損ねた。何とラッキー、と、満面の笑顔。末永く喜ばせたいものです。

私が誰かを喜ばせようなんて気持ちになれること自体、珍しいことです。夫や息子は別ですが、大体は他者に対してこう思うのが常でした。「あんたらも悲しめばいい、苦しめばいい」もちろん口には出しませんが。いわゆる「他人の不幸は蜜の味」です。若い頃、幼い頃の苦労や苦しみは程度にもよりますが、ひど過ぎれば人を育てるよりは損ないます。いびつで非情な人間にしてしまう。私がそうなりきってしまわなかったのは、やはり誰かのおかげでしょう。

人はひとりではうまく生きられません。自分以外の誰かが必要です。その誰かは嫌いな人ではダメです。早くいなくなってほしいと思うような人ではダメ、いなくなってほっとするような人ではダメなのです。ほっとした体験があります。他人に言ってもわかってもらえないと思うので、詳しくは言いたくありませんが、嫌いな人と暮らすより、好きな人と暮らす方がずっといい。そんなこと誰でも知っているでしょうが、できない場合もあります。特に子供時代は好きな人と暮らすなんて夢のまた夢でした。私は人生の後半でやっとそれを実現できるようになりました。後半と言うより晩年でしょう。

子供の頃、私は誰もかれも嫌いでたまらなかった。まず自分が嫌いでたまらない。夜寝る前には、明日など来ないでほしいと思いました。その原因が今では、はっきりわかっています。私は愛情のない家で生まれ育ちました。言葉で言うのは簡単ですが、そんな体験のできた人はあまりいないと思います。そもそも愛情もないのに、子供が出来ることが問題ですが、子供自身がそれに気づいても、大人たちはとぼけ、ごまかします。何か訊いて

も、子供は知らんでいい、などといった返事しか返って来ません。
　友だちはどうだったんだろう。やはり子供は知らんでいいと言われていたのか。言われない子もいたのか。私は友人たちの家庭内の話を聞くのが嫌でした。ホームドラマを見るのも嫌でした。これでもか、これでもか、と言わんばかりに、物わかりのいい頼もしい父親や、優しい母親が出てくる。きれいだし、子供もきれい。家もきれい。私の現実とはあまりにかけ離れ、疎外感、不快感が増すばかりだからです。
　私の現実は、親に体調不良を訴えても、労りよりは貶す言葉が返ってくることが多かった。風邪ひくのは気持ちがたるんどるから、成績下がるのは怠けとるから。ちょっと体調崩した同級生が、親の勧めで学校欠席した、とか、成績下がると、家庭教師を付けてくれるような話を聞くと、呆然としました。いずれも私なら、こき下ろされて、休むな、甘えるな、と言われるだけなのです。
　私の友人たちも大抵の子は愛情のある家庭で暮らし、私の苦しみや不快感を推察も想像もできないようでした。私には家はあっても家庭はなかったように思います。

　ところで、ほんの少し前まで、私はずいぶん弱気でした。
　かねてより、日本の性犯罪の法律が改正されていき、ついに世界標準になり、性教育も、世界からは、やはり遅れているにしろ、旧民法時代からすれば随分改善されていくのを見るにつけ、自分の出生の野蛮さがつくづく情けなくなっていました。かねてからそうで、いくら理にかなった性教育に出会えるようになっても、自分の出自までは変えられないことを、情けなく思っていたのです。自分と対極にあるような人の誇らしい発言を聞いたりすると、情けなさは深まります。
「自分は婚外子で差別される側に生まれたが、自分の出生の根拠は愛情で、それに支えられてきた」と言う人がいます。母親からそう言われたそうです。その有名人はことあるごとにそれを言う。今も言い続けているでしょう。誇らしげに。
　そんな発言は、われわれには羨ましくも空しい。まぶしく、うっとうしく、体調も低調な時には、自分には何の値打ちもないと思えてきます。望ましい生まれ方でもないのに、何を頑張って人並みになろうとしてるの？　しんどいだけ。さっさと消えてしまう方がいい…

　こんな疑問にも煩わされていました。
「レイプから生まれた私（の身体）はレイプを肯定しているのか。肯定、あるいは容認している？」
　それを聞いた友人は言いました。（便宜上、友人 A とします）
「そんなふうに考えてはいけない」
「ではどう考えるの？」と、私。
「…」
　埒もあかない不毛なやり取り。でも、受け答えしてくれた友人 A のことは親切だと思いました。自分の切実な問題でもないのに、何とか答えを見いだそうとしてくれる…「私の知ったことじゃない」と突き放されても仕方ないような問題なのです。それを突き放さずに何とかしようとしてくれている…。　私はその前日あたりから、思いついていることを口に出しました。「**規格外**」。それを紙に大きく書いて見せました。
　規格外野菜などは、生産者の希望に反して規格外になってしまうのですが、性教育的…　の方は最初の最初から規格外になるべくしての規格外。いうなれば、野菜ではなく郵便物の定形外か。
　私（の身体）は（性教育的には）規格外なのか？

友人 A は「そうではない」などと、その場しのぎのようなことを言いました。「そうだ」という方がよほど問題解決の早道なのに、そう言えば私を傷つけるような気がしたのでしょう。
これはほんの先月のことですが、もう少し前には、もっとズレた人がいました。
私が性教育の重要性を感じ始めたのは、かなり以前からです。まず教わる側としては物心ついた頃から、次に教える側としては子供を持つと同時に……私は性教育の重要性には人一倍、敏感だったと思います。いろいろ見聞を広め、日本だけでなく、諸外国のことも知るようになりました。’18 年に出た『教科書にみる世界の性教育』などは、随分勉強になった本で、私と同世代の子を持つ友人 B にも紹介しました。
昨年 3 月でした。B とその読書感想などを話し合った時のことです。
その本で紹介された諸外国では、どこでも性暴力は否定され、性教育はその防止の為でもあるということでした。私もそれはいいことで、性教育は大いに普及すべきだと思えましたが、現実に性暴力から生まれた自分というものをどのように理解すべきか困惑もありました。
私は自分の立場の困難さをこう表現しました。
「どの国も、一律に性行為は愛から始まるものだと教える。そうでない始まりから生まれた我々は、そのことを知らない方がよかったのだが、知ってしまった場合は、独自に自身の立ち位置を模索しなければならない」
それに対して友人 B はこう言いました。
「私にはその感覚がない。親同士がどうあろうと、自分は自分だ、と思っている」
私は、**親同士がどうあろうと**、とは、ずいぶん大風呂敷広げたな、と思いながら、こう言いました。
「あなたが私と同じような生まれ方、育ち方をして、なおかつそう言えるなら大したものだ」と。
それ以上やり取りは続きませんでしたが、人は体験しないことは解らないものなのでしょう。

私とこの友人 B とのやり取りは、もう少し解り易い譬(たと)えで言うと、

「わが家の地盤が崩れて、困惑している」と言う人に、
「わが家の地盤は大丈夫です」と返答しているようなものでしょう。
それに、今になって気づくのですが、その友人 B が言った**親同士**という言葉、これは私には言えません。言いたくないのです。**同士**という言葉は、身分や境遇、性質などにおいて互いに共通点をもっている人を意味する言葉ですが、その言葉で敵対する両者を一括(ひとくく)りにすることに私は抵抗があります。レイプ犯とその被害者を一括りにすることはできません。
何の抵抗もなく、**親同士**、と言えた友人 B は、思わず知らず自分の両親の和合を白状していたのでしょう。(そういえば**両親**という言葉も B はさらっと言っていましたが、私にはしんどい言葉です。必要に迫られて、やむなく使うこともありますが、極力避けたい。見たくも使いたくもない言葉です）とにかく、B については自身が愛から始まった出生だから、「その感覚（独自に自身の立ち位置を模索しなければならない）がない」のです。B は現実には連れ添う両親しか知らない。レイプ犯の被害者から生まれるという体験をしていないのです。だから「その感覚がない」のは当たり前です。

私が仮にその B のように、自分自身では、親は親、自分は自分と峻別(しゅんべつ)できたとしても、世間はそうは見なしません。世間一般からすれば、私は○○の子であり、○○は私の親で、私を生み育てたことになっているのです。いわば蛙の子は蛙。そういう「見做(みな)し」にどう抗(あらが)うか、どう説得するか、または無視するか…

レイプによる出生と一口に言っても、時代や、女性側の知識の程度によっても、その受け止め方は違ってくるでしょう。私を産んだ女のように、生まれた子を全く自分の分身だと思う場合もあるし、知識ある女なら全く男の分身のように感じるでしょう。これらを一律に論じることはできません。ここでは、無知な女、または奇特な

女が、子供を殺すことなど思いつきもせずに育てた場合について考えます。
　レイプで生まれた人間には、恐らくそうでない人には想像できない場面が幾つも出てくるのです。まず、その子はレイプ犯をどう呼びますか。対面したときの呼び方、そうでないときの呼び方、それぞれに考えなければなりません。考えて思いついたものがあっても、しっくりこないものばかり。続柄、いわゆる父、母、祖父、祖母など、その呼称自体、私にはうっとうしいのですが、一般的には自分から見た親族の関係性を表す言葉で、関係を人に理解してもらうには便利です。だから、むげに避けてしまう訳にもいかない。
　男が反省もせずオヤジ面して威張り続ける場合、または反省して謝ってくる場合、または行方をくらましてしまっている場合、それぞれの場合に子供はそれに対する処し方を考えなければなりません。余計な苦労です。他の子供には考えられない余計な苦労。こんなことはほんの一例。実際に出てくるごたごたは凡人の想像をはるかに超えるのです。　――凡人と私は言いました。ふとそう言ったのですが、そう、われわれレイプの産物は凡人とは言えないでしょう。非凡、規格外、そういう類のものだと思います。外国では、見えない子供、野獣の子、奴隷の子などとも呼ばれるそうです。大抵は見下げられます。自身の犯罪でもないのに、犯罪の権化のように。われわれへの接し方は普通の人たちにはなかなか難しいようです。
　昨年７月、法改正で不同意性交等罪が創設された時の友人 C とのやり取りを思い出します。C とは、もう十数年来の付き合いで、互いの家族関係や気心もおおよそ解りあっています。私の亡母とも面識があり、その苦労に満ちた人生もあらかた知っています。
　不同意性交等罪創設のニュースを聞いた私はこう言いました。
「いいことだけど、私なんか、ますます肩身が狭くなる」
　すると C は困ったような顔になり、ちょっと笑って見せました。私は「何か言ってよ」と思いましたが、C は何も言わずじまいでした。友人 B よりはマシかな、と思いました。いえ、その時には物足りなさと言うか、ずるさのようなものを感じて心穏やかではなかったのですが、今、こうして何人かの友人の反応を比べてみて、そう思うわけです。B もまた考えを変えるかもしれない。まあ、自分の発言を覚えていたらの話ですが…。　A、B、C 共に、自分の発言や反応など、その場限りの泡のようなもので、覚えてもいないでしょう。
　実は私は仲間が欲しい。同じような境遇に生まれた人々に会って話をしてみたい。でも、このささやかな願いは実現困難です。超困難。まず、そういう人々は自分の出生、露骨に言えば氏素性を隠すのが常で、名乗りなどあげるはずもない。それに私自身そうですが、その話題など、おくびにも出したくない時もあります。また、自分の出自を知らない人も多いと思います。運よく自分の出生のいきさつを知らないまま責任ある養育者に拾われて暮らす人もいるでしょう。
　となれば、やはり身近な友人に期待してしまうのですが、実は私が彼らに望むことは難しいことではありません。「大変だったね」のような労いのことばだけでもいいのです。友人 A がそれに近いことを言ったように思うので、かすかな期待をしています。
　他人が変化するより自分が変わるのが早かったようです。やがて私は気づきます。自分の出生に関する長年持ち越した疑問について、そもそも、そんな出生を、自分の事として考えたこともない人に訴えてみたり、訊いてみたりしたのがよくなかったのだ、と。自分でもう一度、よく考えることにしました。
　私（の身体）は（性教育的には）規格外なのか？
　私の知る限りでは、性教育なるものを実践している国は、どこでも性暴力を否定している。相手が同意しない性交。それは性暴力になるので、してはいけないことになっている。また性の快楽の側面も否定せず、避妊の具

体的手法まで教えている国もある。ろくに教えないのは日本ぐらいのもの。性交には互いの愛情と同意が必要だというのは世界共通のようだ。愛の有無は当事者しか判らないので、第三者がはっきり言えるのは相手が同意しない性交はしてはいけません、ということだ。ここで性愛なる言葉が出てくる。愛とは何ぞや、などという問題には深入りしないまま**性愛**は尊重される。思うに、これを **種の保存という本能に基づく欲求** などと言ってしまえば興ざめなので、そう言うのだろう。現実に女側の体験として、身体を巧妙にいじられ、次第に濡れ濡れになっていくとき、「あー、私は**種の保存という本能**が目覚めつつある」なんて思わない。何故か知らないが抗しがたい欲求に圧倒されて「入れてほっしーい！」となる。そうなって挿入容易に相成り、どがじゃがと、ひと騒動あって後、双方ぐったり心地よい疲れに身を委ね、眠りこける。
平凡な性愛、性交とはそういうものだろう。平凡こそ幸せだ。命を繋ぐ巧妙な仕組みでもある。

ところで問題なのは、実際は**性愛**ならぬ**性憎**でも人が生まれることだ。信頼や愛情どころか、憎悪しかないレイプでも人間が生まれてしまう。その場合、女が男を憎むだけではない。男の方も女を憎むことが多いのだ。古今東西、戦場などでありがちなことで、知識としては誰でも知っているだろう。だが、そんな命について、性教育はだんまりを決め込む。LGBT については相当な配慮をするようになった性教育が、ある種の規格外の命については依然として知らん顔。それはムリもない。そういう規格外を作らないように指導するのが性教育だから。
一見平和で開けているように見える地域でも、家族関係が崩壊した場所ではレイプでも何でもありだ。近親性交、威嚇や脅迫によるレイプ。死んだ方がましだと思いながらも死にきれずに、女たちは父親不明の子を産む。産み捨てられる子もいれば、育てられる子もいる。性教育的規格外児は沢山いる。私のように出生に関わる人物を把握できるとは限らず、自身が規格外であることも知らずに乳児院などで暮らす子もいる。私は自分の出生に関わる人間を特定できるだけ、まだましなのかもしれない。(この現実的妥協は実は私らしくない。私の理想はもっと欲張りだ。理想は自身が規格外であることも、出生に関わる人間も知らないまま、愛情ある養親の子になることだ。これは語り始めると終わりそうもない。「子供が自身の出自を知る権利」は無視できないが、それよりは実生活の快適さが優先だと思う。即ち、責任ある養育者と衣食住の保障だ。親が不明であろうと、親に捨てられようと、その国で生まれた子はその国の人財として尊重されるべきだ。子供が闇から闇へ捨てられるなど、国家の恥だ。親のない子は適宜親を与えられ、その実子として養育される。親不適格者の元にいる子を救出する必要もある。国家機関は親の選択、資格認定、アフターケア等、子供たちの世話に東奔西走、精進努力してもらおう。それこそが国家の値打ち、品格というものだ。「こうのとりのゆりかご」、「小さないのちのドア」などに頼るようなケチな根性は恥ずべきだ)
品格ある国家が品格ある人民を育てると思う。人民の一部にでも極端な貧困が生じるようなことのないよう、国家は知恵を絞るべき。カネに不自由しなければ、誰でも品格は保てる。(と言いたいのだが、これまた、そうも言いきれない。カネを持てば持つほどに品格なくす人もいて、これは別途考える必要がありそう）ともかく、普通の感覚を持つ人々とでもいうべきか、適度な金額で品格を保てる人々に適度なカネをくまなく分配すること、それが国家の役割というものだろう。ごく一部の人にだけ、生まれながらに多額の予算が付くようなことをすべきではない。

彼らに明らかな国家安寧化(あんねいか)能力があり、祈ればたちまち災厄除去、疫病封じ、戦争お終(しま)いとなる等の保証があれば話は別だ。大いに特権階級として優遇すればいい。そのような能力もないのに、祈祷(きとう)のまねごとをするだけで、ありがたい、畏れ多いと優遇するのは、おバカというものだ。結果も出さないのに、祈ってくれるだけで、ありがたいなどと思える神経が不可解。とても不可解。
折しも'24 年元旦早々、石川県で震度 7 の地震、日本海側広範囲で津波発生。その日に夫は言った。
「見てみ、これで天皇また、おとなしーなるで。だまーって、おとなしーなって、じーっと身を潜めるんや。ほ

とぼりさめるまで」
翌 2 日に宮内庁は恒例の新年一般参賀を中止すると発表した。「天皇、皇后は、今回の被害の状況に心を痛めており、両陛下のお気持ちを踏まえて宮内庁が中止を判断した」そうである。天皇夫妻は心痛めるだけで、何も判断できないわけか。心痛めるだけなら地球の裏側の人でもできる。先代も同じようなことを露呈し続けたが、いい加減、もうやめよう、という話にならんのか。祈ってるんだろ？　国の安寧、世界平和を願って祈り倒してるんじゃないのか。費用も人員もつぎ込んで。
対費用効果を算出して公開すべき。効果なければやめてしまえ。国民の血税だ。なぜ、皆ボサーッと黙っているんだろう。

現実には、私はそういう国に生きている。そういう国の、特権階級とは限りなく縁遠い立ち位置で暮らしている。当座ここで何ができるかを考えよう。
現実にできないことを望んでも埒は明かない。現実に可能なことからよりマシなものを選び出そう。まず、**私（の身体）は（性教育的には）規格外**なのか？　の答えを出すことだ。

その答えは出ました。確かに私は性教育の規準からすれば規格外です。手短に**性教育的規格外**とでも言っておきます。それには違いないのですが、問題の核心はそこではないようです。それでなぜ私が引け目を感じたりしたのかということです。弱気のどん底にいたときは、自分は堂々とレイプを糾弾すべき立場にはないように思いました。レイプ糾弾などは自分の命と引き換えのように思えたのです。レイプだけではなく、以前にも何かと親を批判したくなる時、したと同時に自分が消失してしまうような錯覚に襲われました。ほんの子供の頃からその感覚はありました。
その頃も多分、まだ世の中にも、生んでくれた親への批判はタブーという空気があって、私も知らぬ間にそれに感染していたのでしょう。今更批判しても生まれ変われるわけじゃなし、しんどいだけだ、という思いもありました。
それが、しんどいなんて言ってられん、ちゃんと決着を付けようという気持ちになっていった。
季節が移るようにそうなった。自分でもなぜそうなっていったかよく解りません。

…いつの頃からか、規格外になった責任は私にはないと気づくようになりました。一部の宗教者が言うように、子ども自身が親を選んで生まれてくる、という説には私は抵抗があります。私はそんな生み方をした親に責任追及しますが、こと男によるレイプの場合、産んだ女よりは産ませた男の方に責任があるのは当然です。今でこそ、アフターピルや堕胎という対処方法がありますが、私が孕まれた頃はそんなものありません。無理に自力で堕胎しようとして、命を落とした女も少なくなかったといいます。そんな危険を冒したくない女たちは仕方なく産んだのです。排泄物のように。
子ども自身が親を選んで生まれてくるというのもありえないことでもない。その考え方なら、私は、男に思い知らせるために生まれてきたということになります。女を手籠めにして子を産ませたらこんなことになるのだということを、思い知らせるためです。しんどいには違いないでしょうが、それはそれで意義あること。自分の立ち位置としてはまずまずです。男に思い知らせるために女の手助けもしました。実際、私は女の武器だったような気がします。女が男に復讐するための武器。

武器とか復讐とか、穏やかならぬ言葉を並べなくてはならないのは、男が愚かだから。男全般ではなく、**その男**が愚かだったから。生身の女を知らず、子供を知らず、何より自分を知らなかったから。男が自分のことを犬猫でもできる強制交尾しかできない生き物だと知らずにいたことは、傍迷惑（はためいわく）なことだ。いや、犬猫に失礼だ。犬

猫でも子供を育てようとするだろう。護ろうとするだろう。男はそれさえできなかった。女に産ませておきさえすれば、後は自動的に育つかのように思っていたのだろう。女の育児の苦労にも無知無頓着。女からの忠告にも耳貸さず、初子を死なせた。

　私より先に生まれ、死んだ子は男の不甲斐なさによって命を落とした。詳細は省く。女親がそれを機に男と縁切りしようとしたこと、それを親に邪魔されたことも省く。ムカつくことが多すぎる。

　時々思う。何もか忘れて、思い切り泣いてみたい、と。すると自分が、ただ大人たちに利用されたに過ぎないこともわかってくるのではないか。私は女親に、武器として、あるいは助言者として利用されたとも言えるでしょう。女親はよく困っていました。

「あの男の話は全く要領を得ない、何を訊いても、どっちでもいい、みたいな、返事しかしない。もう何も訊くまいと思うが、傍にいれば、つい訊いてしまう」

　私としては、こう思いました。

「そんなこと、結婚する前に、あんたの親に言うべきや」

　私は子供として可愛がられたり護られたりするよりは、よほど、利用されたという実感の方が強いのです。そんなことを露骨に言ってしまうと、気持ちも萎えるから、ほどほどにしますが、他人や部外者から見たら、まるわかりだと思います。私は親に子供として大事にされるよりは、手近な相談相手として、しばしば親代わりとして利用された。だから子供らしくなかった。

　人間の中でも例外的な男については、しばし棚上げしておきましょう。私が伝え聞くところの、彼が脳膜炎後遺症だったということを考えあわせ、そうしておきます。男自身は病気のことを知りません。知らないまま死にました。知らせるべきは彼の親でした。彼の親がしないことを子供の私がする筋合いはありません。医者や患者と直接、接したわけでもないのに。

　さて、一般論。性の欲求自体は人間として当たり前の平凡なものです。それがあるのに、子供は要らないと頑張る人たちがいます。避妊や何やも面倒だし、性欲さえなければどんなに自由になれるだろうと思ったりするそうですが、ちょっとその気が知れません。なくなればなくなったで、生きる意欲もなくなりそうな気がします。宦官たちは去勢された後でも性欲はあったといいます。何と性欲とは強靭なものでしょうか。生命力そのものという気がしてきます。性欲がなくなればいいなどという寝言は生命に対する冒涜です。

　若いうちは人間が滅びてしまわないように備わっている仕組みに素直になって生殖し、年老いて生殖能力なくしてからは、いい運動代わりにすればいい。

　ところで、私は先ほど、こんなことを言いました。日本の性教育について、「世界からは、やはり**遅れている**にしろ、旧民法時代からすれば随分改善されて…」と。その**遅れている**点について、書いておきます。最初から今のように遅れているわけではありませんでした。今の小、中、高の学習指導要領には「性交」は示されておらず、小学５年理科では「受精に至る過程は取り扱わない」などと明記されるような堕落ぶりですが、1990 頃から数年間は世界標準とも言えるまともなものでした。即ち、成人男女の性器、性交についても図解入りの詳しい説明があり、性交中の男女の図まであって、子どもたちの真摯な質問に向き合えるようになっていたのです。受精以降のことをいくら詳しく学んでも、どうやって受精するかを教えないというのでは、天井から、手の届かない宙ぶ

らりんの縄梯子を下ろされたようなもので、子供たちは途方に暮れるばかりでしょう。また、この悪しき方針「受精に至る過程は取り扱わない」にこそ、同意なき性交を許す危険があります。過程こそ重要です。性交の相手が同意するかしないかには触れず、とにかく受精から話を始めるというのでは、野蛮な時代のレイプと変わりません。日本の男たちはいまだにそれに未練があるのを白状しているようなものです。

2003 年ごろから一部保守派による性教育バッシングが盛んになり、国会や議会でも、露骨な性教育、性教材は相成らぬと貴重な教材が没収されたりしました。当時首相だった小泉氏の言動が印象的でした。

七生養護学校の教員たちが工夫して作った性教育用の人形を見て、「あー、これは、ひどい」と言いました。障害児に生殖の仕組みを教えるための人形だから性器もあります。教員たちの真摯な取り組みを理解せず、巷の猥褻玩具にようにしか評価できない浅はかさに私は失望と怒りを覚えました。小泉氏はこんなことも言いました。「こんなことは誰から教わるまでもなく、自然にわかってくることで、自分の経験でもそうだった」とか。まるで自分をお手本にしろとでもいうような言い方。誰もあんたはどうだったか、などとは訊いていないのに自己顕示欲が強いというか、聞いている方は話をはぐらかされる感じでした。

また、障害児ではない人には自然に解るので不要だということがありうるにしても、障害児には必要な事です。そもそも、健常者でも、自然にわかってくる、などという本能任せの姿勢が問題なのです。本能が目覚める前にこそ、しっかりした知識を持たせることが重要で、性病や性犯罪の防止に有効なのです。この人は、それさえわかっていない。

こんな人が首相？　私は、もちろん軽蔑しました。「この国、終わりやんか」とも思いました。今は彼も現役降りて久しく、ただの老人です。その息子は親の七光りで、わけわからん人気もあるようですが、こんなおじさん達に惑わされないことです。

日本の法律がやっと世界標準の、「同意なき性交は犯罪」になったのですから、性教育もそれにそったものに改善、いえ復活すべきです。

学校用の教材が退化してしまっても、心ある人たちが、教材がよい内容だった頃のことを伝えています。
その例を紹介すると、

『教科書にみる世界の性教育』　http://www.kamogawa.co.jp/kensaku/syoseki/ka/0947.html

『あっ！　そうなんだ！　性と生』　https://www.eidell.co.jp/books/?p=4529

あたりでしょうか。

最近私の夫が思うように勃起せず、しても維持できなくなったと言い出しました。私がその回復術の本を見せると、パラパラめくり、体操の絵なども見ていましたが、こう言いました。
「めんどくさそうや。ぶっつけ本番であんたを稽古台にする方が楽しいわ」
そうでしょう。楽しいことの方が体によさそう。実際、夫はそうやって、また回復して元気になりました。

余談はともかく、子供が生まれるということ、その責任は明らかに親側にあります。
なのに、私はまるで自分自身の責任でもあるかのように自分の出生を悔やんだり、汚らわしく思ったりしていた。
私はなぜそのような世迷いごとを思ったり、言ったりしたのか。これが本題でした。

さてその答えですが、普通、人はそう思うだろうから、ということです。それを改めて、突き詰めて責任問題まで考えて、初めて、生まれる側には責任がないとわかるのであって、そうでなければ、わかりません。生まれた子供にも責任があるような詭弁も現にまかり通ったりしています。

なんとなく世の中に溶け込むように暮らしていた人間が、自分が実はレイプで生まれたと知ると嫌な思いをす

るのはあたりまえ。レイプ自体が汚らわしいことだし、それにかかわった人もそう、それから生まれた自分はその権化だと思ってしまうのは仕方ないことです。私はそれを突然ではなく、思春期頃から、じわじわ知っていったので、大ショックでもありませんでしたが、成長と共に自分への不潔感はどんどん増大していきました。

90 歳近くになった女親がレイプ被害をはっきり明言するはるか前から、私は自分が愛情から生まれていないことに気づいていました。人の命なんて、ちょっとしたきっかけで生じてしまうもの、大したことないと思っていました。今でも、実は、肉牛と人間の命の尊さの違いがよく解りません。

子供時代、親からなじられたり、うっとうしがられたりしたことも私の自己嫌悪や引け目をエスカレートさせたのでしょう。親とはむろん女親です。

親は自分が子供時代にそうされて「なにくそ！」と思って頑張れたから、自分の子にもそう言ったというのですが、手荒な育児です。ムチとアメのうち、専らムチで扱われたということです。しかし、命までは奪われなかったので、育ててもらったということになる…　あー、そんな考え方がありました。殺されさえしなければ、育てられたことになるので、感謝報恩しろ。命を貰っているんだから命投げうってでも恩返ししろ。親の権限絶大視する巷の宗教などがよくブツ教えでした。生かされるか殺されるかの二者択一。**虐待**という概念がないのです。

とにもかくにも、私は子供の頃、褒められるよりは貶されることが多かったので、自分には値打ちがないと思いました。その情けなさは、「自分は婚外子でも、愛ある出生だ」と誇る人に増幅された気がします。よく考えたら、こちらの方が決定的かもしれない。母親から自分を愛の結晶のように言われてそれを誇るということは、愛なき交接、出生が軽んじられることに通じます。

私は女親から、よその子に比べて劣っているようなこともしばしば言われました。とりわけ困惑したのが、男親に似ていると言われたこと。（これは、実に、忘れてしまいたいのですが、なかなか思うようにいきません）これは貶す言葉として言われました。女親の口調や表情で解ります。わが家の鉄則は、いかなる点においても、その男に似ることがあってはならないのでした。

ところで、女親はそれなりに、子供には愛情を持つと言い続けました。ただ、子供には難解な愛情で、ちょっとやそっとで理解できるものではありません。子供が男親に似ていることを不快に思うのも彼女の愛情、深い愛情。しぐさや口癖も男に似ること相成らんという空気が家じゅう充満し、くつろげません。

女親が子供が自分に似ていないことを不快に思ったのは、自分が産んだ子供は丸ごと自分のコピーである筈だと思っていたからでもあるでしょう。思いたがっていた、というか、性知識皆無で出産すれば、そういうこともあると思います。その後、否応なしに性知識を得ていったとしても、100％自分の子だと思わずにはやってられん、そういう思いもあったでしょう。彼女の実感としては、こんなものです。

親が命じた結婚相手、知能の程度も気心も知れない男には、奇妙な癖があった。こともあろうにこちらの股間に自分の一物を突っ込んでくるのだ。自分は最初はそれで大けがをしてひと騒動だった。それに懲りて、もうしないかと思いきや、その後も繰り返ししてくる。痛みこそマシになっていったが、どさーっと重たい身体を乗せてきて、不快さは増すばかり、なぜこんな妙な癖があるのかこの男は。やはり脳足りんなんや。召集令状が来て、行ってしまった時にはほっとした。あのまま戦地へ行きっぱなしでよかったのに、何で返ってくんねん、いつまで生きるんやろ？

女の実感としてはそんなところだろうと思います。実際、女親がこう言ったのを私は忘れられません。
「せっかく召集されて、おらんようになっとったのに、死にもせんと帰ってきょってなあ…」
そう言う時のがっかりする顔まで覚えています。
性体験にしろ、出産にしろ、経験している女本人にとって男は関係なしです。相手がどんな感覚なのか、そんなこと知ったことではない。私も初めての性体験では圧力を受けている以外の感覚はありませんでした。相手の男が私にのしかかってきて、じたばたした後、てんかん発作を起こしたのかと思いました。男も経験浅いうちは、女が白目むいて気絶したら、てんかん発作だと思うかもしれない。感度いい女、良すぎる女はよくそうなるそうです。これが自分では自覚できないことが多いので面白いと言えば面白い。
余談はさておき、私の初体験の男、あばれ、呻き、その後心臓バクバクさせ、ぐったりのしかかってきて、そりゃ、重たいのなんのって、快感なんていうけど、いったいどこがそうなの？　と思いました。私の時代は知識も十分で避妊もしていたので、事なきを得ましたが、仮にこれで妊娠をしても、あまり嬉しくないだろうと思いました。快感なしの、重労働だけを引き受けるわけですから。
私の女親が快感なしでも、子供を我が身の一部だと思えたのは、性交を性交だと認識できず。挿入はその男独自の癖で、妊娠はその男には無関係の自分の身体の変化だと思い込めたからでしょう。

そういえば女親は「子供らには、あんなやつの血なんか一滴も混じっていない」と言ったことがありました。断言しました。私は逆らえませんでした。生物学的な説教したところで始まらないことです。
頼りにしていた最愛の人に死なれ、親に見放され、きょうだい、親戚も頼りにならず、何とか気を紛らすことのできるのは身近の子供…ということでしょうか。
私は十代の終わり頃だったか、女親にこう言ってやったことがあります。
「甲斐性もない、嫌いでしかない男と離婚しなかったあんたの気が知れん」
すると直ぐ言い返してきました。
「あんたらがおったからや。我慢したのはあんたらがおったから」
この意味が長らく私には解りませんでした。私にできる解釈は、まずはこういうものでした。
子供が離婚の障害になった。子供さえいなかったら、さっさと自由になれていたただろうに。
子供としては心苦しく、自分がこの人の人生をフイにしてしまったような気がしました。
ところが、女親の言いたいことはそうではなさそうでした。
無謀で無責任な亭主や親、親戚などには愛想が尽きても、子供には愛着を覚えた。子供に不自由をかけたくないので、離婚してたちまち生活に行き詰まるような冒険はできなかった。片親という引け目も感じさせたくなかった。
時代を先取りしていた私にはこの考えも古臭く思えて反論もしましたが、当面世帯主の収入を利用できているわけで、むげに否定するわけにもいきませんでした。
1940~50 年頃なら、その判断は妥当なものだったでしょう。
私がなんとかそれを理解するまでには、かなりの時間と労力が必要でした。女親は弁舌に優れたというわけでは全くなく、口下手で、表現も無骨でした。貧しい農家に生まれ、家族間での会話や話し合いが評価されず、労働が優先された環境ではそうならざるを得なかったのでしょう。片方がそんな能力しかない場合、2 人の人間が一つ屋根の下で暮らしても、相互理解には長い時間と忍耐が要ります。

諦めて他人以上に疎遠になってしまう場合もあるでしょう。私の身近にも、いくつかそんな例があります。私が女親に対してはそうなってしまわずに、労力も時間も惜しまず、何とか理解に漕ぎ着けたのは腐れ縁というか、

何というか、私の追究癖というものでしょう。
　追究してよかったと思います。追究しなければ、軽蔑や嫌悪で終わっていたであろう私の女親への評価は大きく変わりました。彼女は強かでした。賢明でした。あの劣悪な環境で、条件で、あれだけのことを成し遂げた女を私は知りません。最も評価できる点は女が自分の親の正体を見抜いたことです。死ぬ少し前に、言いました。自分に不本意な結婚生活を押し付け続けた親について「あれはただのバカやったんや」と。私は褒めました。「そうやで」と。
　女がそのエネルギーをもっと別の所に使えたら、女自身にも世の中にも、もっと喜ばしいことになっただろうに。まとこに、バカ親というものは、子にとっての害悪であるだけでなく、社会にとっても害悪なのです。

「あーあ、気の合う人と暮らしたかった！」と言う女に、私は、それが人間の本来なので、その気持ちは大事にし続けるように言いました。そしてあの世へ行くとき、親が、さも反省したような顔で詫びながら迎えに来ても、乗るなと言い渡しました。「そんなことをするとまたあんな親の所へ生まれてきてしまうで」と。これには考えるより先に口に出た言葉です。私には時々こういうことがあります。女は素直にそれを受け入れました。

　夫は私の子供時代のことを詮索したことがありません。夫も子供時代にはいい思い出がないので、思い出したくないと言います。似た者夫婦、うまくいっています。私の古い写真アルバムも、レイプ犯の写真はすべて処分してあるので、夫は知る由もありません。私は何度か、男親の嫌な思い出を話したことはあります。新婚の頃、まだ子供もいない頃でした。その時、夫がうっかり言ったのが、
「何やかや言うても、あんたが今あるのは、その人のおかげや。文句言うたらいかん」
のようなことでした。私は非常に不快になり、一揉めしました。生んでもらうということは、無限の恩恵を授けられ、その親のいかなる批判も許されないかのような古臭い説教。私は夫に抗議し、夫は次第に私の言う事も理解するようになりました。彼自身の親に対する考えや態度も変わっていったようです。自分が我慢すれば事態は丸くおさまるような考えはしなくなりました。親や親族にも言うべきことは言うようになり、敬遠されるようになりました。私はそれを頼もしく、嬉しく感じました。
　この柔軟な頭の持ち主との縁談を推し進めてくれたのは、実は私の女親でした。私は男親が死んだ後、ほっとして一度は人並みに結婚ということをしてみましたが、楽しくなかったので、程なく別れました。
　今だからさらっと言えますが、離婚はいい加減くたびれることでした。これは巷の噂が本当だな、と思えました。**離婚は結婚より難しい**、というウワサ。 私の場合は、結婚前に女親から「嫌だったらいつでも帰っておいで」と言われて、結構簡単そうに思えたのですが、なにせ相手の絡むこと、実に大変な苦労をしました。自分の親や相手の親戚の方にも色々お世話になりました。ここでも、人はひとりでは生きられないと、思いました。
　苦労話はさておいて、バツイチでいた私にまたもや縁談がもちあがり、相手もバツイチというので、気楽に話しているうちに縁談整い、今日に至ります。私の女親の目の付け所は、学歴でも財力でもなく、人相でした。
「人相がいい。一緒になり」
一度目の縁談の時には言わなかったことでした。

　さて、私の**（性教育的）規格外コンプレックス**　は解消できそうです。そんな思いに悩まされていたのは、睡眠と栄養の不足、運動不足も相まってか。やはり歩くことはいいことです。毎日 40～50 分は歩いて脳に刺激を与えよう。

性教育も普及しない頃に生まれた人間にとって、性教育的に規格外であることがどうだというのだ。そんな人間の規格外は何の不思議もない。むしろ規格外であることの確認ができたのはいいことだ。規格外なのに規格外でないかのようにごまかされている人も少なくないだろう。そのようなごまかしは宗教や道徳などが得意とすること。古今東西、彼らは丸め込みに余念がない。男の強引さは健全な本能のように言われる。どんなに理不尽に見える結婚でも実は神仏の導きでそうなったのだから、定めに逆らうべきではないとも。ろくに空腹も満たせず、人々の脳みそが栄養不足だった時代ならいざ知らず、今の時代でもそれを信じる人がいる。
　性教育にしろ、性犯罪の法律にしろ、改善されていくのはいいことで、それにそった子供が生まれるのはいいことです。しかし、私自身は改善されない頃の権化のような存在で、その問題をまだ解決しきれていない。私は先ずはそっちの解決からです。
 レイプ犯は今でも、私に、
「なんやかんや言うても、わしのおかげで生まれたんや、文句言うな」
　とか言っているんだろうか。

「甲斐性もない自分が軽率にも女を手籠めにしてしたせいで、おまえらが生まれてしもた。せんでもええ苦労をさせることになった、すまん」とも言わずに？
「その時代はそれでよかった。男は威張り、女は従う、皆それでやってきた」などと居直っているんだろうか。

　でも、死ぬ少し前に、私の容赦ない詰問にしどろもどろ答えた後、「わしが間違うとったんか？」と言い、手を合わせて「すまん」と言って見せ、「もう、わしに気を使うな」と言った。あれは、あいつなりの詫びのようなものだったのではないか。女親より更に酷い口ベタの彼にすれば、精いっぱいの詫び？
…女親の声が聞こえてくる。
「騙されなよ。またウソやで」
　ギャンブル狂いはもうやめる。盗みやごまかしも二度とせん。タバコもやめる…
　そんな寝言の数々、実現したためしがなかった。ああ、いやだ。
　全く信じられずにいた人物の言葉は最後の最後まで信じられない。深く考えるのはよそう。あいつのことだ。言った片っ端から忘れていくあいつのことだ。真に受ける方がバカを見る。

　それでも、あいつがこう言った時には思わず溜飲が下がった。
　「おかあさん、不感症とちゃうか」（「おかあさん」というのは日本の男たちがよく言うところの、自分の妻のこと）これにはすっきりした。よくぞ感じないでいてくれた、心身共に嫌い続けていてくれた、と思った。

　ほんの子供の頃から、自分のオヤジが嫁とったのは、妻子を養うためではなく、ただで女に触れるからだとわかってしまうのは、愉快なことではありません。私は誰から教わるまでもなく、それを知っていたような気がする。暮らせばわかる。我々子供はよその子供のように親を慕えなかった。親に頼もしさがなく、衣食住ことごとく、よその子より粗末なものしか与えられなかった。オマケに夜な夜なひどいいびきで眠れない。眠い目をこすりながら、やめてくれと言いに行くと「わしゃいびきなんかかいてない！」と怒鳴る。無論ウソだ。
　防音設備の行き届いた家に住みたいとか、自分の部屋が欲しいとか、よその子を羨むようなことを言うと、「そんな所へ生まれてこい！」と怒鳴られた。怒鳴るのは女親で、男は困惑した顔で、「そない言うてくれな」と言うのが常だった。何をおねだりしても、約束しても叶うためしがない。我々子供は早々にオヤジを見切っていた。
　オヤジは稼ぐ気もなく、育てる気もなく、教える気はさらさらなく、タバコふかしては「わしゃ、損する、損する」などと愚痴ていた。

「結婚したのに（させてくれん)」から、損した」という意味だ。ひょっとしてこれは女親が漏らしたことかもしれない。女親は一家を支えていた。主婦業に加え、解雇された亭主の再就職の世話、自身の内職に始まり、正規社員としての会社勤め、全くわれわれ子供とゆっくり話す時間もなく働き詰めだった。というより、話したくなので、労働に逃げこんでいるようにも見えた。何であれ、話し合うことはわが家では評価されなかった。時間の無駄とされていた。**話し合ったところで、始まらん** のだ。その女親がちらと漏らしたのかもしれない。

「あいつ、甲斐性もないくせに、わしゃ、損する、損する、言うんや」と。

死んだ者らのことはわからずじまい。不毛な勘ぐりはほどほどにしよう。それより、現実の人々に目を向けよう。友人や多くの人々が言うような、

「それでも、あなたの命の元なんだから許してあげたら？」にどう対処するか。

こういう寝言が一番厄介。体験がないということはとんでもない発言を平気でしてしまうということです。私の本心はこうです。私はレイプを肯定しない。容認もしない。許すなんてとんでもない。私が生まれたのは、「女を凌辱したら、こんな目に遭う」ということを男に思い知らせるためです。性交だけでなく、生活のあらゆる場面でその男は暴力的でした。

そもそも、自分の所業を暴行だと自覚しない、または子供には隠しておきたいという狡さが許せない。

私は子供の頃から、女親に、その男の、女子供に対する暴行癖を聞かされている。「あいつが無茶を言い出したら、どんなに自分が正しいと思っても、何も言うな、逆らうな、半殺しにされるから」と教わった。

女は新婚早々その男の醜悪な暴力場面を見せつけられ、げんなりした。男は年の離れた小学生の妹を、半殺しの目に遭わせた。そばで見ている親きょうだいは知らん顔だった。妹の言動の何が気に入らなかったか知らないが、大の男が小さな少女を本気で傷めつけるさまは醜悪きわまりなかったという。その事件のずっと後になってから女親は付け加えるように言った。「あの男はそうやって自分の強さを見せつけようとしたんやろう。張り切ってな」長年見てきたその男の気心というか、習性によればそういう事だったんだろうと女親は言いました。

私が男になつかなかったのは、男を信頼も信用もしないから。女親の忠告もさることながら、銭湯の男湯にも入れた子供の頃、湯船でゆでだこにされ、のぼせて気を失い、あの男の恐ろしさは身に染みている。もう十分温もったから、出たいというのに、押さえつけられた。よそのおじさん達がいてくれたから助かったのだろう。後日それを聞いた女親はひどく悔やんでいた。体調すぐれないから男に預けてしまったが、もう二度とそんなことはせん、と。

あの男ときたら虐める気もなく、まともに世話するつもりでも、できない。そういう男だ、あいつは。全く、女親の言う通りだ。戦地に行って行きっぱなしになったらよかった。あの男が帰ってきたからといって喜ぶ者がいたのだろうか。そもそもが、脳膜炎後遺症の障害者、加えて戦争体験による PTSD。厄介者以外のなんでもない。それにしても、なぜ障害者が徴兵検査に合格するんだ？　いい加減すぎる、日本という国は。

ところで銭湯というのはためになる所でした。小さい子供の頃は男湯女湯行き来自由。こんなに理想的な性教育現場はない。子供はよほどバカでない限り、気づくだろう。老若男女の身体の違いに。その違いはなぜなのかも知りたがるだろうし、大人はその時きちんと教えたらいい。そのうち解るなどといってごまかすのはよろしくない。自分が親にごまかされたから、自分が親になっても子供に同じようにしたらいいと思うのは、怠慢というものだ。時代は進むのに、とんでもない後退というものだ。

私の息子は不幸にして銭湯通いという機会に恵まれなかった。その代用になりそうなものはアダルトビデオで、思春期前に成人男女の裸体を観察できたのはせめてものことだった。家庭で見る親たちよりは遥かに若く美しい。挿入場面の露骨さも、子供にとっては、わかりやすさという点で、回りくどい文面やお話などの比ではない。夫が処分しようとしたものを子供が見つけて、見たがったので、私は子供と一緒に見た。交接場面では、子供が訊いてきた。

「おかあさん、こんなのした？」と。「ああ、したよ」と私は答えた。

ダメだ、見てはいけないなどと言って処分してしまっていたら、子供はモヤモヤしたまま大人になってしまっていただろう。見せてよかった。子供 10 歳ぐらいだったか。私と一緒に見てよかったと思う。実に有意義なビデオだった。筋書などは覚えていない。レイプまがいの話ではなかったと思う。凡庸でも、なんとか見るに堪えるような筋書だったのだろう。よく覚えていないからそう思う。われわれ（特に私）が注目したのは裸体の見事さだった。男女共いい身体をしていた。猥褻だと非難されるものには美しいものが多い。思うに、猥褻とか、卑猥とかいう非難は、体型崩れたどうしようもない人たちのやっかみではないか。

さて、私が問題にしている男の話に戻ろう。彼は自分が親におとなしく従ったように私が自分に従うと思っていたのだろう。ばかたれ、私は、あんたとは、**できが違う**。あんたを父親などとは呼ばないし、あんたのごまかしなど容易く見抜ける。暴露するし、思い上りは引きずりおろし、コテンパにやっつけてやる。あんたの親父どもも道連れだ。というより主犯は彼らだ。レイプ実行役は親の指示でやったにすぎない。当時は結婚に両性の合意など必要なかった。本人の署名も要らなかった。親の裁量で娘たちは当然の務めのように嫁がされていった。思慮深い親は娘の相手を調べ、選んだろうが、そうでない親は考えもなしに娘をさっさと手放した。私の女親のオヤジだけでなく、当時の父親たちはお粗末なのが多かった。彼らが本気で考えるのは跡取り息子や、そのまた息子のことだけらしい。娘たちは嫁にやってお終いだ。嫁がせ先を選びそこなって、娘が苦しんでも、それは娘の宿命だと言い放つオヤジもいた。

私を産んだ女は間違いなく凌辱された。女が自分でもはっきり「**強姦された**」と明言するまでに 70 年近くもかかったが、それより前に死んだ男も認めていた。男の甲斐性なしは隠しようもなく我々子供にも丸見えだったが、性暴力については隠せると思ったらしい。そんなこと無理なのは、女を見ればわかるだろうに。女はあんなにあんたを嫌い、避けていた。そうだ、私の詰問に、ついにあんたが白状したように「最初の印象が悪かった」のだ。あんたは気づかなかったか？　女は苦痛と不快で便所で吐いたという。それを聞いて私はなぜ男の面にぶちまけなかったかと叱った。すると女は、「そんなことしたらどうせその後始末は自分がしなくてはならないだろうから」と答えた。私は涙も出なかった。

その後ろくな取り繕いもせず、詫びなどさらさらせず、さらに暴力、暴言で手籠めにし続けたのだから、女があんたを許す筈ない。「汚らしそうにするな」と言って、手籠めにしていたらしいな。女はあんたが死んだ後、私に訊いてきた。「あいつ、私に、『汚らしそうにするな』言うねん。どう思う？」と。私は答えた。「汚いやん」と。「そやろ」と女はほっとしていた。

これを知った私の夫は言った。

「すごいおっさんやなあ、ぼくなんか、汚らしそうにされただけで萎えてしまうわ」

あんたが死んであの女がどんなにほっとしていたか、見せたい、見せつけたいよ。歳 60 過ぎだったが、若返り、元気できれいになった。あんたがいるうちは思い切っておしゃれもできなかった。ちょっとおめかしすると、

あんたがジロジロ見るその目が耐え難く嫌だったからだって。だからいつもみすぼらしくしていただろ？　ぼさぼさ頭、ボロな服。わざとだ。あんたをなるべく遠ざけておく為だ。あそこは家庭とは名ばかりで、実質は戦場だった。

　酷い時代だった。既婚女性は自分の同意なしの性交でも受け入れるしかない時代だったから、女の受難は想像を絶する。私の女親が艱難辛苦の末、やっとたどり着けた安息地は、男に煩わされなくて済むというだけの場所だった。女性本来の心身共の幸福などには至りつけずじまいだった。性欲やオーガズムやの言葉は聞くだけでもぞっとしたようで、それを知り、語る友人を軽蔑していた。寡婦同士、いい茶飲み友達で、よく行き来していた人がいたが、その人がする「そういう話」だけはぞっとする、と言っていた。
「そんなこと興味もないわ、と言うと、あの人、そうか？　ええもんやけどなー、なんて言うんや、野蛮で動物的なことを。ぞっとする」と。私は何も言えなかった。

　そういえば姑の悪趣味な話にもぞっとしたと言っていた。できの悪い息子を見たくないのか、ほとんど家に居付かず、派出婦などで、他所の家庭に泊まり込みの暮らしをしていた姑が、その家の夫婦生活を覗き見して、その様子を喋るのだ。女がよがり、叫ぶのを、家へ帰ってきては口真似までしてしゃべくり回る。女親は聞くに耐えない、不快極まりなかったという。もちろん彼女自身も覗き見被害に遭っている。よその女たちとは違ってウンもスンも言わないので、がっかりしたのだろうが、ことが終わって戸を開けると姑がそこに座り込んでいた。
「何してるんですか」と言うと、黙ってふてくされていたという。
　この姑（私にとっては祖母）は、われわれ孫にも親しみの湧かない存在でした。年がら年中、住み込み先を転々とし、うちへは思い出したように時々顔を見せるだけでした。その連れ合い、私にとっては祖父となる人物については、私は顔も見たことがなく、写真さえありませんでした。女親はこの人物と面識がありました。彼は息子に嫁とらせた後、程なく死んだそうです。50 代で。

　私の女親は寡婦になった後も、男性との個人的な付き合いは避けていたようです。誘う男もいましたが、断っていました。自分が体験した最初の男の印象が悪すぎて、それをずっと引きずってしまったのでしょう。女としての自信も実はなかったかもしれません。女親はいつも冷え性で悩んでいました。薬用酒、夏でも毛糸のパンツ、靴下、等を手放せない。それでもよくならない…
　女が本来望んでいた男との暮らしが実現していたら、もっと心身共に健康で、明るく楽しい暮らしができていたでしょう。定期的にオーガズムも得て、冷え性でもなく、不感症でもない、幸せな暮らしができたでしょうに。戦争はかけがえない人を奪い、その人を当てにした人の人生をも狂わせ、おまけに余計な人間まで生み出してしまう…あ、これは失言。人権団体に突っ込まれそう。この世に余計な人間などいないのだ。その人間の扱いに周囲の人々が困り果てるとか、使い道が容易に知れないとかいう人間はいる。だが、それを不要な人と言ったり、余計な人間と言ったりしてはいけない。なぜか、なんて突っ込まないでほしい。なぜか知らないが、それがこの世の通念、良識というものだからだ。いわば、衣服のようなもので、これなしに世の中を歩き回ってはいけないことになっている。

　女親自身の凌辱ということに話を戻すと、更に見逃せないことがある。男に凌辱される前に、女はすでに父親から人権侵害されている。性暴力こそないが、殴打、搾取、対話拒否などさんざんされ、挙句の果てに売り飛ばされた。彼は健常者の娘を精神障害者の男に嫁として売り飛ばした。娘が承諾もしないのに、娘に無断で結納金を受け取り、ことを進めた。
　1940 年代初期の日本では、結婚前に女が性知識を得ることは困難で、良家のお嬢様でもない限り、無知無学の

まま放り出された。嫁ぎ先で暴行された娘は実家へ帰りたがるが、親は門前払いしたという。彼らの考えは我が家の食い扶持を減らすことだけで、娘の幸せなど、みじんも考えない。娘を嫁がせることを「片付ける」という。昔の言葉で、今は死語かと思いきや、まだ、生きている。なんともはや忌しいことだ。

嫁ぎ先が自分の意に沿わないことが判れば、今の時代なら、親を当てにせず、さっさと離婚、自活することも可能だが、80 年以上も前は、そんなことのできる女はほとんどいなかった。自活できる職業を持つ女性はごく少なく、生活の為に結婚を続けるしかない女たちが殆どだった。ご丁寧にも、私の女親は、そうするしかないように仕組まれて嫁がされた。相思相愛の人に戦死され、失意のうちにも、自立の為、看護学校へ行こうとしたのを父親に断念させられた。お人好しの女は工場勤めで得た給料を、父親の求めるまま全部渡してしまっていた。いくらかでもへそくっておけば、学費ぐらいは何とかなっただろうに。オヤジは毎月、給料袋ごと、ひったくるようにして我が物にしていたという。

さて、本題中の本題。私がとことん思い知らせたい男は 3 人います。レイプ犯、その父親。レイプ被害者の父親。(母親も忘れるわけにはいかない。胎児や嬰児を殺めたトンデモ婆。詳細は省くが自身は離婚、再婚を経験済みの女だ。私が知っているだけでも 8 人の子を産んでいる。この人物と私は生きて対面した覚えがない。幼児の頃、初めて会った時は死体だった。その連れ合いの爺は私が小学生の頃は生きていた。いつ死んだかよく覚えていない）彼らが既に死んでしまっていても、だからどうでもいいや、なんてことにはなりません。私の彼らに対する評価をはっきりさせておくことが大事なのです。男の親も女の親も早々とあの世へ行ったりボケたりして責任能力なしですか。悔しい。被害者は全くやられ損じゃないですか。

女にとって重要なのは、快、不快です。快は不可欠で、不快は排除すべき害悪でした。3 人の男たちは寄ってたかって、女に有害な不快を押し付けました。快適さはみじんも与えませんでした。彼らが野蛮な性暴力を、合法的結婚に見せかけようとしても、無駄な事。女はごまかされません。苦痛の叫び、嘔吐で抗議します。

レイプで始まっても、そのうちに女が快感に目覚め、男にひれ伏すというのは、アダルトビデオの世界でのお話。大方は男たちの勝手な妄想、彼らは現実の女を知りません。知ろうとしません。自分が惨めになるからでしょう。

この話は男たちが 3 人がかりで頑張っても、結局 1 人の女をも丸め込むことができなかったという実話です。女は私も入れると 2 人です。私があれこれ入れ知恵して女親を助けました。女親 1 人では、レイプ犯との戦い、子供たちの世話だけで体力消耗してしまい、お終いになっていたかもしれません。あー、忍耐強い立派なばあちゃんだったなあ、で終わっていたかも…しかし、私の援助がなくてもそんなことで終わってしまえる女だとは思えません。そんじょそこらの人たちにはない性根のようなものがありました。お人好しと言えばお人好しですが、憎むべき相手のことを忘れるほどのお人好しではありませんでした。自分の不幸の元凶をはっきり知ったとき、両親の写真を破り捨てました。

私が具体的な戦略、戦術を考える前から、私を産んだ女は、男たちへの復讐を決意し、虎視眈々と狙っていました。私が生まれ育った環境はそういうものだったのです。

女親にとって苦手中の苦手は小学生だった私からの質問、
「赤ちゃんはどうしてできるの？」でした。私は素朴に、わからないから訊いていたのです。親を困らせようなんて意図はありませんでした。でも、私の親にとっては何とも痛い所を突かれるような気がしたのでしょう。そ

の質問には、よその母親たちも戸惑いがちだったそうですが、私の親のような嫌悪を露わにするものではなかったようです。照れくささのような、柔らかさがあったようです。私の親はそんなの皆無でした。いやな顔して黙ってしまう。何度か訊いたことがあったと思いますが、いつも結果は同じでした。そのことが伯母（女親の姉）の耳に入り、私は伯母から説教されることになりました。お母ちゃんが困るようなことを訊いてはいけない、というのです。私がおとなしくハイと言うと、伯母は私の疑問に答えてくれました。伯母流の妊娠の仕組み解説はわかりやすいものでした。当時はまだ野良犬も多く、道端で交尾する姿もよく見かけました。
「あんたも見たことがあろう？」と伯母は言いました。「人間もああいうことをするのよ。しかし人間様は外ではしない。行儀よく家の中でする」とのことでした。
　伯母は私の気持ちが読めないままだったと思います。私は、なぜ、おばちゃんが言えることをお母ちゃんは言えないのかなと思いました。でもそれは口に出しませんでした。言うと伯母が困るだろうと思ったからです。大人を困らす子は嫌われるのです。あー、子供の頃の心得ごとの第一は、大人に嫌われないこと、その一点だけだったのを思い出します。大人の顔が曇る時、それは黄信号で、怒ると赤信号、生活の指針はそれだけでした。
　その頃には私も妊娠の仕組みは知っていたと思います。小学校も高学年だったと思います。同級生の男子が自宅から持ってきた百科事典を見せて得意そうにレクチャーしました。それを丸ごと信じた子もいれば、家へ帰り、親に確かめた子もいました。翌日、ある子はいいました。「うちのお母さんはそんなの絶対ウソだと言った」私も家へ帰って確めようとしました。図解までして説明しましたが、やはりうちでもウソだといわれました。なぜ、女親たちが否定したのでしょう。やはり望まないことだったからとしか思えません。

　私には巷（ちまた）のうわさや通説を、親に確かめてみるという習性がありました。世の中でまかり通っていることでも、身近な親が否定すれば、世迷い言になってしまう。例えば結婚は好きになった者同士がするものだという通説も、現実の親を見ればウソでしかない。特に女側にすれば、好きどころか大嫌いな相手で、親や親戚にハメられただけのことでした。私はそうならないように気をつけようと思いました。好きだと思って結婚してみたら、嫌いなことがわかってくるのかなとも思いました。では、しないのが安全。そう思いました。
　「赤ちゃんはどうしてできるの？」の質問は私が小学生のある時期に何度かしたと思いますが、最初はともかく、同級生からレクチャ一受けてからは、本当に知らないから訊いた、というよりは、どんな答えが返ってくるかを知りたくて訊いたような気がします。そこで、親が、照れくさそうに顔でも赤らめていれば、私も凡人で済んだのです。あれこれ詮索しなくて済む凡人で。
　現実の女親の困惑しきった顔を今でも思い出します。その顔の謎を説きたくて、私は凡人になることを諦めました。根掘り葉掘り探求する煩（うるさ）い人間になったのです。

　私がその質問もしなくなった、もう少し成長した頃のこと、井戸端会議での猥談にも私の親は加われませんでした。よその母親たちが嬉しそうに、お父さんの竿（さお）とか、何とか言って笑っている時に、片隅で苦虫噛み潰した顔で黙っていました。それを気にとめる人はいなかったようです。私ぐらいのものでした。

　もっと幼い頃には私は女親の冷たさにしばしば困惑しました。いわゆるお母さん的な温かみがなく、事務的な能率の良さだけが目立ちました。笑顔は少なく、楽しみもないようでした。おいしいものは我々子供に回して、自分は食べないことが多いので、私は大人になりたくありませんでした。こんなおいしいものが欲しくなくなってしまうなら、大人になりたくない、と思いました。
　そうなのです。私が胸ふさがる思いになったのは、女親の笑顔のなさ、楽しみのなさでした。これはわれわれに対する虐めや冷遇というわけでもなく、子供にとって、指摘することさえ難しいことでした。われわれの世話

はきちんとするわけですから。

この人の楽しみって何だろうな、と思ったこともあります。庭に毎年撒く朝顔の種が芽を出すことか、その花が咲いてまたできた種をとっておくことか、人形作りの仲間に誘われて芸者姿の人形を作ってみることか。若い頃には舞妓や芸妓に憧れていたというから。いずれにしてもささやか過ぎる楽しみです。大人になる、結婚するというのがこんなことなら、自分は大人になりたくない、と思いました。

貧しいわが家ではなかなかテレビなるものが買えず、私が小学生の頃はご近所さんにテレビを見せてもらいに行っていました。我々子供がよその家で笑っている間、自宅で女親は能面の顔で、家事にいそしんでいたのでしょう。昼間の勤めの疲れもあっただろうに。そういえば時々、いえ、しばしば女は爆発させていました。怒りを、でしょうか。苦しみに耐えかねて仰向けに寝転んでギャーッと叫ぶ。私にはそう見えました。見ていて不安だけど、どうしたの？　と訊くのも怖くて黙っていました。

さて忘れないうちに子供のことを話しておきます。二度目の結婚後、私に授かった子供です。新婚早々、「子供は苦手でほしくない」と言った私に、寂し気に、「そうか、でも女の人は子供を産むようにできとんよ」と言った夫。

その後、あれこれ考えに考えた上で、しかもおまじない的な、幸運を呼ぶあれこれの対策も講じた上で、私は子供を産むことにしました。これは頑丈でもない私の身体を案じていた女親にも予想外のことで、それだけに入念な援助がいると思ったのでしょう。有形、無形、色々と助けてくれました。資金も十分に援助してくれました。女親は広島県の東の端、福山で生まれ育ちました。広島市内から離れてはいても原爆の影響もなきにしもあらずと心配したと思います。私自身も心配でした。

生まれた子供は小柄で元気な男児でした。私としては申し分ありませんでした。
人間まるごと、それも男を女の自分が取り仕切ったという満足で私はほくそ笑みました。妊娠に男が関与はできても、ほんの一瞬、後は何もできない。（ごく少数派ですが、出産時に助産師の役割を果たせる男もいます。頼もしくも羨ましい限りです）
夫は息子をことのほか可愛がりました。いわゆる祖母となった私の女親も孫息子を可愛がり、孫息子も祖母を慕いました。ボクとばあちゃんだけのヒミツのようなこともあったようで、ばあちゃんは嬉しそうでした。カラオケ仲間と楽しそうにやっていたのもこの頃かな。若い時には見かけない姿でした。マイクもって、十八番を披露するなんて。
孫娘もいました。私の弟は私より早く結婚し、早々に娘を２人もうけましたが、特に書き留めるほどの話ではありません。ごくありきたりの娘で、ごくありきたりの人生を送っていると思います。数えてみれば娘は既に 40 歳を過ぎています。実は私はもう弟と付き合いがありません。女親の死後すっかり音信不通になりました。互いに会ったり話したりするのが億劫なのです。とにかくいい思い出がありません。甲斐性なしの親が原因です。子供の人数に見合う経済力もない親ほど始末悪いものはない。何かと不自由に悩まされる子供は親を憎む前に、自分やきょうだいを憎みます。不幸の原因を作った張本人は親（特に男親）だったとわかってからも、子供時代の嫌な思い出が消え去ることはないのです。

さて、性生活の雑談的なことも書きたくなりました。思いつくことから。まず、陰毛。性毛とも言います。この扱いについては、古今東西色々だそうです。今の時代でも、欧州とか中東では剃るのがたしなみとされ、定期

的に剃り上げるそうですが、私の体験から言うと、とんでもない暴挙です。剃り跡の感触の悪さを外国人は感じないのでしょうか。痛いのです。剃り跡が痛くて、とても接触していられません。
　われわれも何度か失敗しました。軽い気持ちで剃り落したはいいが、接触時に痛くて痛くて話にならなかった苦い体験があります。回復までが待ち遠しく、いい加減苛立ちました。脱毛クリームやワックスによる処理なら、かなりマシです。永久脱毛、いいですね。われわれももう少し若ければしたでしょう。
　それにしても、閉経後の女は性欲もなくなるなんて巷のウワサがありましたが、ウソでした。私にとっては真っ赤なウソ。知識人の間でもこのウワサのいい加減なことを見抜いてしっかりした見解を示す人が多くいます。いい時代になりました。避妊の手間もいらず、いつでも OK。

　記録もつけます。カレンダーに、イケた時は実線の♡、そうでない時は点線のを書き込みます。２人のハートマークはそれぞれ自分用の♡で、見分けがつくようにしてあります。
　私のは♡、夫のは♡みたいな感じでやっています。黒一色でやっているので、こういう工夫になりますが、色彩で見分けるようにしてもいいでしょう。

　以前はマルチオーガズムでは ♡♡♡のように描いたり、♡♡♡を入れ子のようにして３重ハートを描いたりしていました。

　閉経前にマスターしてしまいたいことがあったのに、できずじまいだったことがあります。経血コントロールです。今でこそ、検索すれば色々出てきますが、私の若い頃、つまり 50 年以上前はそんなこともできず、ごく限られた人々（芸妓など）の秘技みたいなものだったようです。
　経血は普通、自分の思い通りに排泄できないので、ナプキンやパッドというものをあてがい、生理期間を過ごすのですが、これを、自在と言えるほど器用に排泄したりしない、ができる人がいるのです。私はそんな人のことも知らないで、ある時、経血排泄を自在にできそうな感覚を覚え、やってみると、実際にできました。20 歳前後だったでしょう。できたけど、かなり時間がかかるので、忙しい時には諦めました。そのうちゆっくりやってみようと思ううちに、時は流れ、時代は去りゆき、気が付けば閉経してしまっていました。
　女親が時々言っていました。「この、生理というのだけは神様の落ち度やな。出したい時にだけ出てくれたらいいのに。おしっこみたいに」と。若い頃、田植えなどの野良仕事で休憩もできない時は本当に困ったそうです。いくら沢山綿花を当てておいても間に合わなくて。…そもそもトイレ自体がない所で労働させるのは問題じゃないですか。本題とは離れるけど、そうです。無茶な労働です。作業場にトイレもないなら、生理休暇ぐらい与えてやるべきじゃないですか。
　その娘は子供の頃から大人並みの重い穀物を背負わされ、いかつい肩になってしまうほど、とにかくこき使われていたのです。それが親孝行とか言われる時代だったのでしょうか。若い時、無理な体の使い方をしたら、歳とってからの健康に響きます。歩行器でとぼとぼと、何とか移動しながら、女親は私に言いました。
「こないなりなよ」（こんなふうになるな）と。
　老母の背骨や足腰の不具合はその頃の無理がたたっていたと思います。だから私は無理をしない。子供の頃の無理だけで沢山です。これからは精々楽しむことにします。

　「**規格外**」と紙に書いて見せた友人 A に、また会って、その後の私の進展を話そう。「私はそれに違いないのだけど、その責任は私にはないのよ」と言ったら、きっと喜んで、「あ、そやね！」とか言ってくれそう。
　または、先ずは、やはりどう考えても私は「**規格外**」なのよ、としんみり言ってみようかな。私の方から言い

出さなくても「そうなった責任はあなたにはない」と言えるようになっているかもしれない。
　会って話すときだけがその人に事を思う時間ではなく、常々思っていればそれぐらいの進展はあるかもしれない。でも、とんでもないことも口走っていた。
「お父さん可哀そうやん…」とか。まあ、知らないから言ってしまうんだろう。
　知らないことは教えよう、事細かに順序だてて。こんな気持ちになるのは私が彼女に好意を持つからだろう。私の、誰をも彼をも嫌いだった子供時代はもう遠い昔話になった。あの友人だけでなく、私は夫が好きで、息子が好きで、そのまた息子が大好きです。その子を産んでくれた人が大好きです。

　でも、その子たちが暮らす所はいい所とは言えず、これから良くなる見込みも薄いことが気がかりです。私は子供をそんな所に産み落としたことに後ろめたさがあります。結婚も出産も、自分の健康には役立ったけど、子供を自分の為に利用したような気もしています。子供は小さい時、「ここに生まれてよかった」と言ってくれたことがありました。詳しくは覚えていませんが、子供にとって何か楽しいことがあったときです。私は子供時代にそんなことを思ったことがありません。驚くというか、誇らしいというか、複雑な気持ちでした。

　困るのは、この地、この国。より正確には、日本政府。昨今、次から次へと悪政、愚策連発。米軍基地辺野古移設、国が初の「代執行」、最初から大損丸見えの上に予算青天井の大阪万博、さらに昨年末には、「防衛装備移転三原則」の運用指針を改正し、防衛装備品の輸出ルールを緩和。こんなことを国会審議経ずに閣議で決めてしまう。暴挙です。報道自体も言葉を濁し「殺傷能力ある防衛装備品=武器」であることはぼかしています。私は武器輸出ルール緩和も全くのタブーだとは思いません。自衛隊も軍隊にする方がいいと思うし、武器輸出についても議論の余地あるところです。それらの議論には国民参加が欠かせません。それを欠く決定は王様の決定です、民主主義のカケラもありません。米国の日本支配が守備よく進んでいるだけのことでしょうか。米国は最初から日本に本物の民主主義など根付くはずないと思っていたでしょうから。

　でも米国人にも人相のいい人はいます。
　顔こそ、その人の全財産だと思う事がよくあります。沖縄の米軍基地辺野古移設問題で、県民の負託を受けた知事の顔を幾つか思い浮かべます。負託を裏切り、民意を踏みにじる知事と、そうでない知事の顔には格段の差があります。民意の負託の重みを忘れない知事はいい顔をしています。難しい話ではありません。まじめか、そうでないかの話です。公約違反はいけません。
　日本国中、まじめでない人がどんどん増えていくようです。まじめな人が何人かいても、多勢に無勢で、全体としてはふまじめな国に見えます。

　息子より後に生まれてくる子供たちは日本国外で暮らしてほしい。日本国籍離脱して、もっとまじめな国で暮らしてほしい。でもそれは一体どこだろう。この国にとどまって少しでもここを良くする努力をするか、さっさと脱出して新天地を見つけるか、どっちがマシなんだろう。

2024 年　1 月